

AYA 世代がん患者の現状と課題

関西福祉大学看護学部 堀 理江

がん対策基本法に基づく第4期がん対策推進基本計画本が2023年（令和5年）に閣議決定された。「誰一人取り残さないがん対策を推進し、全ての国民とがんの克服を目指す。」を全体目標に掲げ、分野別目標として「小児がん及びAYA世代のがん対策」「小児・AYA世代のライフステージに応じた療養環境への支援」が明記されている。AYA世代とは、Adolescent and Young Adult（思春期・若年成人）のことであり、15歳から30歳代までの世代を指している。小児・AYA世代のがん患者は、進学・就職・結婚・妊娠・出産・育児などのライフイベントを連続して経験するという特徴がある。また、AYA世代特有の課題として、「がんに罹患する年齢ではない」と医療者も患者も思い込む、公的に受診することができるがん検診の対象でないことなどから適切な診療に繋がらないことが挙げられる。

年間約2万人のAYA世代の方が、がんの診断を受けるとされている。AYA世代は、がんの罹患および死亡率が最も低い世代であるが、多様ながん種であり、かつ、希少がんであるため治療法が未確立である。社会的には、思春期世代では、性の自覚や同世代との親密な関係の構築、親からの自立の発達段階にあり、がん治療による学業や就労への影響がある。若年成人世代では、家庭や社会での生活が中心となり、家庭と治療の両立、仕事と治療の両立が困難となり、経済的困窮に陥る、人生設計に大きな不安を感じる場合がある。身体的には、性の成熟とともに生殖機能が活発化する世代である。したがって、がん治療による外観の変化や性機能・生殖機能の低下が課題となる。妊孕性については、パートナーの有無で意識の違いがあるが、妊孕性についての情報提供や本人の挙児希望に合わせた情報提供や妊孕性温存治療が必要となる。

AYA世代がん患者は、がん種が多様でありながら希少性があり、AYA世代特有の身体的・社会的課題が多い。そのため、患者に関わる医療者が、AYA世代がん患者の特徴と課題を理解しながら、心理社会的評価を適切に行い、継続的に支援することが重要である。